

兄と妹の話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	378-390
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001813



兄
と
妹
の
話

178 手なし娘 (1)

ある女は女の子と男の子をうんだ。

さて、二人の子どもはどんどんおおきくなっていき、一人前になった。

さて、兄さんは妹がきれいなのをみて、妹以外の女とは結婚しないといった。

さて、妹は一晩中なく。兄さんの幼友だちはみんな結婚してしま

つた。
さて、兄さんの幼友だちは、「なんだって、友よ、世間をかえりみないで、きみは妹と結婚するというのか」という。若者は妹と結婚するといった。母親も父親も、死んでしまった。妹に友だちがいた。母親も父親も、死んでしまったので、兄さんは妹の世話をしていた。兄さんはアツラーにかけて、妹と結婚しないなら、死んでもよいといった。

さて、兄さんはつぎのつぎの日、結婚のための品じなを妹のところにもっていくことになった。つぎのつぎの日、兄さんは妹と結婚することになった。村の人たちはみんな兄さんのことをわらっている。

さて、妹はどこかにいってしまった。妹がいくと、友だちがいた。妹はすぐに友だちに、「こういうことで、兄さんがわたしと結

婚するという。わたしはそんなことができない」という。友だちが、「それでどうするの」という。妹は、「にげよう」という。二人ははしっていった。二人はどんどんにげていく。二人は野原のまんなかについた。

さて、兄さんは妹がいないのに気がついた。兄さんは、「おつと、よめさんのにげられた。あいつにおいついてやる」といった。兄さんは刀をとり、肩にかけた。兄さんは二人の足跡をおつていった。兄さんが野原のまんなかにいくと、二人がいた。二人はイチジクの木のしたでやすんでいた。

さて、兄さんは妹をつかまえて、「家にかえろう」といった。妹は、「家にはかえらない」という。兄さんは妹の友だちに、「家にかえろう」といった。妹の友だちは、「家にはかえらない」といった。さて、兄さんは妹を家にかえらせようと一生懸命だったが、妹は家にかえろうとしなかった。

さて、兄さんは妹の足をつかみ、二本ともバサツときってしまった。兄さんは妹に、「不信心物よ、そこにいるがよい。かえりたくないなら、かえるな」といった。兄さんは身をひるがえし、家にかえつていき、二人をあとのこした。

さて、妹の幼友だちはないている。二人は夜がやってくるまで、ずっとそこにいた。

さて、女の子の友だちは足をきられた女の子をせおつて、おきあ

がり、どんどんあるいていく。夜がやってきた。二人はタマリンドの木にのぼった。二人はタマリンドの木にのぼると、そこでねた。二人は午前中ずつと木のうえにいた。とうとう、昼過ぎの礼拝のときになり、略奪戦争にでかけていた王さまが家来たちとかえってくる。

さて、王さまたちはタマリンドの木のところへやってきて、やすんでいる。

さて、王さまたちは敷物をしき、そのタマリンドの木のしたに椅子をだした。家来たちがあつまつた。

さて、娘はまだうれないタマリンドの実をつむと、王さまの奴隷のうえになげる。娘はうれたタマリンドの実をつむと、王さまの服のうえになげる。王さまは、「みななもの、あの鳥はなんというかしこい、おそろしい鳥か。うえをみてみなさい」といった。家来たちがうえをみると、二人の娘たちがいた。王さまが、「おりなさい」といった。二人は、おりないといった。王さまは、「さあ、おりなさい」という。二人は、おりないといった。王さまはそこをとおらず、家にかえっていった。王さまは家にかえると、そこで二日のあいだいた。王さまは家にかえると、奴隷を使いにした。奴隷たちがやってきた。奴隷たちは二人の娘をつれていった。王さまは二人と結婚した。夜、奴隷たちは娘をつれていった。王さまは、一人の娘に足がないのをしらなかつた。娘たちはずっとそこに

いた。

さて、娘のうち一人は仕事をしなかつた。料理も、食器をあらうことも、みんな娘の友だちがした。だれにも、足がないのをみられないように、足のない娘は小屋でよこになっている。

さて、王さまはまだ二人のところへやってきていない。

さて、足のない娘の友だちが、「友よ、わかるね。あなたの兄さんはあなたの足を両方ともきってしまった。おねがいだから、ニワトリがきて、モロコシをたべても、シツといって、手をもちあげるなどといわないで」という。ところが、足のない娘はニワトリがやってきて、モロコシをたべているとき、手をあげて、シツシツとい、たちあがろうとした。そうすると、ニワトリは娘に足のないのを見て、「コケッココー、王さまのよめさんに足がない」といった。雌ヤギが、「メー、王さまのよめさんに足がない」という。王さまはそんなことはないといった。

さて、そのつぎの日、王さまは雄ウシをころし、自分の領地にいる人びとをあつめ、人びとに自分のよめさんに足があるかどうか、みせることにした。

さて、王さまの屋敷のなかにいる女たちがいう。ある女は、「なんだって、ほんとうに、あの女に手足があるなら、わたしはあの人の籠の石になる」という。もう一人は、「あの女に手足があるなら、わたしはあの人のウスになる」といった。もう一人は、「あの

女に手足があるなら、わたしはあの人の便所の掃除人になる」といつた。もう一人は、「あの女に手足があるなら、わたしはあの人の水くみをする」といつた。もう一人は、「あの女に手足があるなら、わたしはあの人のウスになる」といつた。もう一人は、「あの女に手足があるなら、わたしはあの人のウマになる」といつた。

さて、夜になった。王さまは屋敷のべつところでねている。娘の友だちは、「友よ、にげよう。あなたは、わたしたちをみじめなおもいにさせた。にげよう」といつた。

さて、娘の友だちは娘をせおった。二人は土塀をとびこえた。二人はどんどんすすんでいく。とうとう、野原のまんなかに来た。二人がいくと、怪物がよこたわっていた。二人がそこをとおるかかと、すぐに、怪物が、「おまえさんたちはだれか」といつた。娘は、「王さまの屋敷でこういうことがあった。兄さんはこのようにして、わたしの足をきってしまった。さて、王さまはわたしと結婚してしたが、そのようなわけで、結婚をやめようとしている」といつた。すぐに、怪物が、「おまえさんは足をもとにしてほしいか」といつた。娘たちは、「もとにしてほしい」といつた。怪物は、「足をもとにもどしたら、おまえさんたちは、わたしになにをくれるか」といつた。娘たちは、「わからない」といつた。すぐに、怪物が、「おまえが子どもをうみ、最初にうまれた子どもを、おまえさんたちがわたしをみつけたところに、もってきておくれ。わたしは、その子ども

をのみこむ」といつた。二人はそれでよいといつた。怪物は、「おまえさんたちはこわくないか」といつた。娘たちは、「こわくない」といつた。怪物は足のない娘を口にいれて、何度も娘を舌でなめた。怪物が娘をはきだすと、娘はどうしようもないほどきれいになっていた。怪物が娘をはきだすと、娘はどうしようもないほどきれいになっていた（足ももとにもどっていた）。娘はまるで、精霊の娘のようにしてもらった。怪物はもう一人の娘も口にいれ、舌で何度もなめた。この娘もはきだした。怪物は、「さあ、もどっていきなさい」といつた。二人はもどっていつた。二人はどんどんはしつていつた。二人は王さまの屋敷につき、土塀をとびこえ、自分たちの小屋にはいつた。二人がすこしねようとしているうちに、夜があけた。二人は夜明けどきの礼拝をし、小屋にもどり、そこにいた。朝はやく、王さまはウマの世話をする人をよび、「いつて、屋敷のまえで、太鼓をたたけ」といつた。

さて、ウマの世話をする人がいき、太鼓をたたいた。奴隸たちがやってきて、雄ウシを三頭つかまえて、ころし、皮をはぎ、その肉をもつてきて、つんだ。奴隸が、「王さまはわたしにこの手で施し物をするようにといつた。わたしは屋敷のそとにいる人から施し物をはじめめる。女も、男もみんな施し物を受けとるように」といつた。なんとということか。人びとがあつまってきた。村の人びとはみんな肉をうけとった。のこるは、王さまの屋敷の人だけになった。

男たちがちがづいてきた。みんなみている。

さて、王さまの屋敷にいる女たちはみんないって、肉をうけとった。

さて、人びとは二人の娘のところに使いをだした。使いのものたちは、「王さまが、おまえさんたちに、きて、施し物をうけとるようにと、いわれた」といった。

さて、王さまのよめさんが、「いって、王さまに、王さまがここから屋敷のそとまで、やわらかい絨毯をしきつめないと、いかなといつておくれ。そうでないと、わたしはいかない」という。王さまは奴隷たちに絨毯をしきつめさせた。

さて、二人の娘はたちあがり、自分たちの磁瑯引きの容器をもった。二人は肉をうけとりに行った。二人がやってきた。二人が小屋と戸口にやってくる、王さまは、「そのものたちをかえしなさい。かえしなさい」といった。王さまの家のものたちは二人をもとにもどらせた。王さまのよめさんに足があるなら、こうなるといっていったものは、すべていっていったものになった。

さて、王さまはいくと、二人の娘たちとねた。それからながいときがたち、足のなかつた女のお腹がおおきくなり、真夜中に、子どもをうんだ。さつそく、女の友だちは、「友よ、アツラーにかけてかわした約束をまもりましょう。その子どもをもちなさい」といった。二人はその子どもを背中にせおうと、とんとんすすんでいく。

二人は野原のまんかにいった。二人がいくと、怪物がいた。

さて、女は怪物に、「はい、子どもをつれてきた」という。怪物は、「つれてきたのか。どうも」といって、子どもをうけとり、のみこんだ。怪物がのみこんだので、女たちは、身をひるがえし、いつてしまおうとすると、怪物はのみこんでいた子どもをはきだし、「おまえさんたちは約束をまもってくれた。わたしはおまえさんたちの子どもをたべない。おまえさんたちの子どもをとり、いってしまいなさい」といった。二人は子どもをつれて、家にかえつてきたとさ。

お話は、おしまい。ウサギの蒸し焼きができた。

(一九七〇年二月二四日、語り手 バーサーウオ出身のアブドゥ

ッラーイ・オスマーヌ、マルアにて)

179 手なし娘(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

さて、ある娘はたいへんきれいだつた。でも、娘には手足がなかつた。娘は夫を手に入れることができなかつた。

さて、娘の幼友だちは娘をせおつて、どこかに姿をけし、やつてくると、ある村についた。

さて、ある王さまはこの手足のない娘がすきになった。その村の

王さまはその娘と結婚した。

さて、娘の幼友たちは娘のために食事をつくってやり、いろいろなことをしてやる。幼友たちはモロコシをつき、それを日にかわかしておき、娘に、「おねがい、わたしに恥ずかしいおもいをさせないでちょうだい。ニワトリがやってきて、このモロコシをたべても、おいはらわないで」という。

さて、幼友だちはいってしまった。ニワトリがやってきて、モロコシをたべている。娘は我慢できなかった。娘は、「シーツ」といって、ニワトリをおいはらった。

さて、ニワトリは、「コケッコー、王さまのよめさんには手足がない」といった。雌ヒツジもそれをうけて、「ムバー、王さまのよめさんには手足がない」といった。雌ヤギもそれをうけて、「メー、王さまのよめさんには手足がない」といった。雌ウシがそれをうけて、「モー、王さまのよめさんには手足がない」といった。

さて、村にいる女がすべてそれをうけて、「王さまのよめさんには手足がない。王さまのよめさんには手足がない」といった。ある女は、「あの人に手足があるなら、わたしはあの人のおベッドになる」という。ある女は、「あの人に手足があるなら、わたしはあの人のお椅子になる」という。ある女は、「あの人に手足があるなら、わたしはあの人のお土ナベになる」という。ある女は、「あの人に手足があるなら、わたしはあの人のおベッドになる」という。女たちは、い

ろいろなものになるといふ。娘の幼友だちがかえってくると、村がさわがしかった。女たちが、「王さまは手足のない女と結婚した。王さまは手足のない女と結婚した」といふ。

さて、娘の幼友だちは、「友よ、わたしに恥ずかしいおもいをさせた」といふと、夜、娘をせおうい、にげていく。にげていくと、野原の動物がいた。

さて、動物は、「おまえさんたちはどこにいく」といふ。動物は娘に、「おまえさんをもとのきれいな姿にしてやったら、おまえさんはわたしになにをお礼にくれるのか」といふ。

さて、娘は動物に、「おまえさんに雌ウシをお礼にあげる」といふ。動物は、「わたしには雌ウシがいる」といふ。娘は、「おまえさんにお金をお礼にあげる」といふ。動物は、「わたしにはお金がある」といふ。娘がなにをいっても、動物はあるといふ。

さて、娘の幼友だちは、「わたしの友だちはお腹がおおきい。この人が子どもうんだら、その子どもをあげる」といふ。動物は、「よろしい。この人が子どもうんだら、その子どもだけがほしい」といふ。娘はお腹がおおきかった。幼友だち娘は、「うみおえたら、もつてきてあげる」といふ。

さて、動物は手足のない娘をもち、（口にいれて）なんどもなめて、はきだした。娘はみておられないほどきれいな上等な娘になった。

さて、幼友たちは娘をせおうと、家にかえっていった。

さて、王さまは自分は手足のない女と結婚していないという。夜があけて、朝になり、王さまは家来たちをあつめて、自分のよめさんにてくるようにという。

さて、よめさんは使いをおくり、自分には足がないので、地面のうえをあるけないという。

さて、王さまは屋敷のなかから、屋敷のそとまで、よめさんがあるところに、絨毯をしきつめた。よめさんは化粧をした。体につけたものはみんなかがやいている。王さまは、よめさんに、「ペールをつけるな」という。よめさんはシャツすらきなかつた。よめさんは腰布を一枚だけ身につけた。足が絨毯をふむたびに、足につけた飾りは歌をうたう。よめさんが王さまのところについた。よめさんがあらわれた。

さて、王さまは、「そのものをもちあげて、屋敷のなかにもどしなさい」といった。王さまの家のものたちは娘をもちあげ、屋敷のなかにもどした。王さまの屋敷のなかにいた女たちで、娘に手足があつたら、ウスになるといつていたものは、娘のウスに、ベッドになるら、ウスになるといつていたものは、娘のベッドに、土ナベになるといつていたものは、土ナベに、みんなこうなるといつていたものになった。娘は子どもをうんだ。娘が子どもうむと、娘の幼友たちはこっそりと子どもをとり、野原の動物のところにもつていった。

さて、動物は、「なるほど、おまえさんは約束をまもる」という。動物は子どもをうけとると、なめて、娘の幼友たちにかえた。動物は、「はしって、王さまにつれてかえってやれ」といった。娘の幼友たちは子どもを屋敷につれてかえってきたとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。ひよつとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにてる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッポ・マンガ、ガウンデレにて)

180 兄さんと妹 (1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

男の子とその妹がいた。男の子は妹と結婚するという。妹は兄と結婚することはできないという。男の子はどうしても自分の妹と結婚するといった。妹の名前はケツルという。男の子の名前はムーサという。

さて、ムーサは腹をたてた。父親はそんなことをしてはいけないといった。母親も、そんなことをしてはいけないといった。

さて、ムーサは腹をたてた。ムーサはどこかにいつてしまおうといった。ムーサは自分のウマにのつた。ムーサはすすんでいくが、喉

がかわいた。ムーサもムーサのウマも、まるで、死にかけているように、舌をだした。

さて、母親はムーサに水をもつてきて、ムーサにいう。

「ムーサよ、

わたしのムーサよ、ここに水がある。

わたしのムーサよ、ここに水がある」

ムーサがいう。

「母さん、水をもつてかえっておくれ。

ケツルがもつてこないよ、のまない」

母親は水をもつてかえっていった。父親が水をもつてきて、いう。

「わしのムーサよ、ここに水がある。

わしのムーサよ、ここに水がある」

ムーサがいう。

「母さん、水をもつてかえっておくれ。

ケツルがもつてこないよ、のまない」

父親は水をもつてかえり、「ケツルが水をもつてくるように」といった。ケツルは、「水をもつていかない」といった。

さて、ムーサのおばさんが水をもつてきていう。

「わたしのムーサよ、ここに水がある。

わたしのムーサよ、ここに水がある」

ムーサがいう。

「おばさん、水をもつてかえっておくれ。

ケツルがもつてこないよ、のまない」

おばさんは水をもつてかえっていった。ムーサのおじさんが水をもつてやってきた。

さて、おじさんはいう。

「わたしのムーサよ、ここに水がある。

わたしのムーサよ、ここに水がある」

ムーサがいう。

「おじさん、水をもつてかえっておくれ。

ケツルがもつてこないよ、のまない」

おじさんは水をもつてかえっていった。ムーサの一族はみんな水をもつてきたが、水をもつてかえっていった。

さて、一族のものは、「ケツルよ、人殺しをしないでおくれ。ムーサに、水をもつていってやりなさい」という。

さて、ケツルは水をもつと、ムーサにいう。

「わたしのムーサよ、ここに水がある。

わたしのムーサよ、ここに水がある」

ムーサがいう。

「ぼくのケツルよ、水をもつてこい。

ぼくのケツルよ、水をもつてこい」

ケツルが水をもつていくと、ムーサはその水をのんだ。ムーサはそ

の水をウマにかけてやった。

さて、ムーサも、ムーサのウマもまえとおなじように元気になった。ムーサは妹と結婚の約束をかわし、結婚したとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。ひよつとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッポ・マンガ、
ガウンデレにて)

181 兄さんと妹 (2)

男の子の名前はムーサという。男の子は村にいる。すなわち、男といえ、この男の子しかいなかった。野原の動物などが村にやってくる、この男の子がでかけていき、とりのぞいた。それが、どれほどおそろしくとも、この男の子がいつて、それをころす。

さて、この男の子の妹がおおきくなった。妹は結婚してよい年頃の娘になった。(妹の名前はケッルという。)

さて、男の子は自分の妹だけと結婚するといった。

さて、村の人たちはみんなそれに反対した。

さて、男の子は略奪戦争にでかけていき、もどってきた。男の子が家にかえって来て、そこまでつくと、喉がかわいてきた。

さて、男の子の母親が水をもってきた。母親がいった。

「わたしのムーサよ、ここに水がある。」

わたしのムーサよ、ここに水がある」

男の子はいう。

「母さん、その水をもつてかえっておくれ。」

ぼくのケッルがもつてきてくれないと、のまない」

男の子はその水をこぼんだ。王さまがやってきて、いう。

「わしのムーサよ、ここに水がある。」

わしのムーサよ、ここに水がある」

男の子はいう。

「王さま、その水をもつてかえっておくれ。」

ぼくのケッルがもつてきてくれないと、のまない」

男の子はその水をこぼんだ。つきからつきへと、べつの人が水をもつてくるが、だれのもつてき水も、男の子はこぼむ。だれがもつてきても、それをうけとつて、のもうとしない。自分の妹がもつてこない、のまないという。

さて、男の子は喉がかわく。男の子の喉がかわくと、どの木もかわいて、たおれてしまう。ヒツジやニワトリなどの家畜も、死んでしまう。人も死ぬ。人びとの喉がかわき、死んでいく。男の子の喉も死ぬほどかわく。男の子は水を(うけとつて)のむと、わらった。村人たちは、「よろしい。ムーサはいつて、妹と結婚するがよ

い」といった。男の子はいった。いくと、自分の妹と結婚した。ムーサは結婚した。ムーサは自分の妹と結婚した。

さて、男の子はわらった。それで、雨がふった。かれてしまったいた木がいきかえった。村人たちの畑の作物も、まえよりおおきくなった。死んでいた人たちがおきあがった。村人たちはすべておきあがり、男の子をいわった。男の子は妹と結婚したとき。

すなわち、腹をたてると、いろいろなことがふきでてくるということだ。

(一九八三年一月二四日、語り手 アーマドゥ・ルファイイ、ガウンデレにて。この話は、ハウサ族の娘からフルフルデ語でかたるのをきいたという)

182 兄さんと妹 (3)

ちいさなお話、ちいさなお話。ヒナ族の母さんの頭にある禿のまんなか。

ある男がいて、自分の妹以外と結婚しないといった。男は妹以外はすきでないといった。

さて、人びとは妹とは結婚しないといった。男はいくと、出入り口のない小屋をつくった。この小屋のなかで、男はなにもたべず、なにものまなかつたので、死にかけた。老女がいくと、男がいた。

老女はいくと、男の家族に男のことをつたえた。男の妹が水をくんで、兄さんのところにもつていき、いう。

「兄さん、ここに水がある。」

はい、水がある」

兄さんがいう。

「だが、水をもつてきたのか」

妹がいう。

「ファートウマがもつてきた」

兄さんがいう。

「ファートウマよ、水をもつてもどつておくれ。」

ほくは、マンマ・ダーソ・ダーソがきたとおもった。

マンマには、それで、水浴びができるように、乳をしぼって

やる。

それで自分の顔がみられるように、月をとつてやる。

それによこになれるように、やわらかいマットレスをしいて

やる」

ファートウマは水をもつてもどつた。弟が水をもつてきた。弟がいう。

「兄さん、ここに水がある。」

はい、水がある」

兄さんがいう。

「だが、水をもってきたのか」
弟がいう。

「ハンマがもってきた」

兄さんがいう。

「ハンマよ、水をもつてもどつておくれ。」

ほくは、マンマ・ダーソ・ダーソがきたとおもった。

マンマには、それで、水浴びができるように、乳をしぼつて

やる。

それで自分の顔がみられるように、月をとつてやる。

それによこになれるように、やわらかいマットレスをしいて

やる」

さて、母親が水をくんでもつていった。母親がいう。

「兄ちゃんよ、ここに水がある。」

はい、水がある」

息子がいう。

「だが、水をもってきたのか」

母親がいう。

「母さんがもってきた」

息子がいう。

「母さん、水をもつてもどつておくれ。」

ほくは、マンマ・ダーソ・ダーソがきたとおもった。

マンマには、それで、水浴びができるように、乳をしぼつて
やる。

それで自分の顔がみられるように、月をとつてやる。

それによこになれるように、やわらかいマットレスをしいて

やる」

さて、父親が水をくんで、もつていった。父親がいう。

「兄ちゃんよ、ここに水がある。」

はい、水がある」

息子がいう。

「だが、水をもってきたのか」

父親がいう。

「父さんがもってきた」

息子がいう。

「父さん、水をもつてもどつておくれ。」

ほくは、マンマ・ダーソ・ダーソがきたとおもった。

マンマには、それで、水浴びができるように、乳をしぼつて

やる。

それで自分の顔がみられるように、月をとつてやる。

それによこになれるように、やわらかいマットレスをしいて

やる」

さて、家族は、「どうしようもない。マンマに水をもつていくよ

うにいいおう」といった。

さて、マンマは水をくみ、もっていった。マンマがいう。

「兄さん、ここに水がある。」

はい、水がある」

兄さんがいう。

「だが、水をもってきたのか」

妹がいう。

「マンマがもってきた」

兄さんがいう。

「マンマよ、水をもつてもどつておくれ。」

ほくは、マンマ・ダーツ・ダーツがきたとおもった。

マンマには、それで、水浴びができるように、乳をしぼって

やる。

それで自分の顔がみられるように、月をとつてやる。

それによこになれるように、やわらかいマットレスをしいて

やる」

兄さんはマンマにとびついたとき。

お話は、おしまい。ニワトリの蒸し焼きができた。

(一九六五年ころ。語り手 セーフ・ハーミドゥの弟、アダマ、

マーヨ・ルウエにて)

183 アーリと妹

男の子がいた。女の子と男の子がいた。男の子は、自分は妹のほかに結婚したいものはないといった。男の子の親たちが、「そんなことはできない」という。男の子はどうしても、妹と結婚するといった。親たちは男の子に、「そんなことはできない」といった。

さて、男の子はその村からはしつて、でていった。男の子はいくと、人のいない野原にはいった。男の子はいくと、出入り口のない小屋をつくった。男の子は野原にはいつていくとき、いちばん気のあう友だちを一人つれていった。友だちは、「きみがいつてしまったら、この村にほくだけであるわけにはいかない。ほくはだれと話をするのか。いっしょにいこう」という。二人はいつてしまった。二人はいくと出入り口のない小屋をつくった。二人はそこにおちついた。

さて、村の人たちは二人のことを耳にした。人びとは、「そういうことで、その男の子の名前はアーリという」といった。

さて、人びとは、「そういうことで、アーリはいつてしまった。アーリは妹と結婚するといった。わたしたちがそれをやめさせようとしたら、家出をしました。人のいない野原にはいつて、そこにすんでいる」という。娘たちはそのことをきいて、どういうことかわかり、たちあがり、野原にでかけていった。いくとき、娘た

ちは着飾った。娘たちは着飾ると、でかけていった。一人の娘がいて、着飾らず、わるい、やぶれた腰布を身につけていた。娘たちうち着飾ってないのはこの娘だけだった。娘たちはでかけていく。

さて、娘たちはでかけていき、川についた。娘たちが川にいくと、老女が川にすわって、水浴びをしている。

さて、老女が、「なんだって、娘たちよ、わたしは水浴びをしているが、わたしの背中をあらつてくれるものがない。おねがいだ、きておくれ。おまえさんたちのうち一人がきて、わたしの背中をこすっておくれ」という。娘たちは、「わたしたちが着飾っているのがみえないの。わたしたちはアーリのところに行くというのに、おまえさんはわたしたちにきて、背中をこすれというの。わたしたちは水のなかにははいらぬ」という。老女は娘たちにしたのむ。娘はそれをこばむ。老女は娘たちにたのむ。娘はそれをこばむ。

さて、老女は着飾らず、やぶれた腰布をつけた娘に、「きて、わたしの背中をこすっておくれ」という。

さて、娘がやってきた。娘は老女の背中をこすつてやる。すると、老女の背中に穴があき、そこから銀がでてきた。よい着物が出てきた。娘がやってきた。老女は、「それをとって、身につけなさい」といった。娘はその腰布をとり、ほかの娘たちとおなじように着飾った。娘たちはでかけていった。娘たちはいくと、アーリの小

屋についた。

さて、アーリの友だちがすわっている。アーリは小屋のなかにいる。娘たちがやってきた。

さて、男の子はアーリに、「ほら、娘たちがやってきた」という。

アーリは、「どこからきたのか」といった。男の子は、「娘たちはほからの村からやってきたとおもう」という。娘たちはやってきて、たちどまった。アーリの友だちはいう。

「アーリよ、お嬢さんたちが、きみにあいにきた。

アーリよ、お嬢さんたちが、きみにあいにきた。

お嬢さんたちは腰布をつけ、着飾っているが、マイラマ・ジ

ヤーロ（おそらく妹の名。）ほどではない」

アーリは、「どこかにいってしまふようにいえ」という。アーリがどこかにいってしまふようにいふと、一人の娘がやってきて、たちどまった。アーリの友だちがアーリにいう。

「アーリよ、お嬢さんたちが、きみにあいにきた。

アーリよ、お嬢さんたちが、きみにあいにきた。

お嬢さんたちは腰布をつけ、着飾っているが、マイラマ・ジ

ヤーロほどではない。

サンダルをはき、アイラインをつけているが、マイラマ・ジ

ヤーロほどではない」

アーリは、「どこかにいってしまふようにいえ」という。そのうち

に、きたない着物をきていた娘がやってきて、たちどまった。

さて、アーリの友だちはいう。

「アーリよ、お嬢さんたちが、きみにあいにきた。

アーリよ、お嬢さんたちが、きみにあいにきた。

一人の娘は腰布をつけ、着飾っている。マイラマ・ジャールとおなじだ。

サンダルをはき、アイラインをつけている。マイラマ・ジャールとおなじだ」

アーリは、「その娘にくるようにつけてくれ」といった。

さて、アーリと友だちは小屋をつぶした。娘が小屋にはいると、アーリがいた。

さて、アーリはさっそく娘と結婚した。アーリはほかの娘たちをおいはらった。娘たちはいつてしまったとき。

お話は、みじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二二日、語り手 マータ・アルハジ・ベッコ・イーサ、ガウンデレにて。この話はギダール出身のフルベ族の人から、一九八二年にきいたという)